

Your Home
In Your Mind

特集「交流居住」
行ってみたいまちから、住んでみたいまちへ

我が“心のふるさと”

今、新しい暮らし方が注目されている。都会に住む人々が、どこか懐かしい原風景を行き来し、地元の人々や文化と交流する新しいライフスタイル、「交流居住」。

四季折々の自然や人々の温かさ...さまざまな魅力にひかれ、上山に移り住んだ人がある。上山が好きで自分が生まれ育ったふるさとに戻ってきた人がある。彼らはこの土地で、「人生の物語」に新たなページを刻みだした。

生まれる場所を選ぶことはできなくても、暮らす場所は自分で選ぶことができる...。上山に誇りと愛着を持ったたくさんの人々の、普段は胸の奥にしまっている“心のふるさと”を、そっとのぞいてみた。

星野活徳さん一家（古屋敷）
（写真後列右）浩子さん
（前列右から）佳乃葉ちゃん・懐多くん・小冬ちゃん・愛犬はる

【第1部】 愛ターン物語

尺八を軸に、どつぱり
田舎でマイペース生活

「帰国するとき、中途半端な田舎より、どつぱり田舎でマイペースに暮らしたいと思った。若いころは関東以外に住むなんて考えられなかったけど、良い意味で『不便さ』も大切にする海外での生活でそういう感覚が吹っ飛んで。市街地から東へ車で15km、山間の小さな集落・古屋敷に神奈川県から8年間のイギリス・ロンドンでの生活を経て移住し6年目になる星野さん一家。また、17歳から尺八に親しみ、仕事の傍ら海外でも吹奏活動をしていた活徳さんは、「周りの影響を受けず、信念を大切にしながら尺八中心の生活を送る先生の生き方に心引かれた」。帰国のタイミングが、高校生のころから指導を仰ぐ師匠・永井栖鳳さん（寒河江市出身）が同じ神

奈川県から山形に戻る時期とちょうど重なったこともあり永井さんと同じ場所ですれまでの吹奏に新しく製作を加え尺八を軸にした生活を送るつと一家で上山へ移住することを決意しました。

「雪以外は特に心配はなかった。よく周りに聞かれるけれど、不便だという感覚は全くない。欲しい物がすぐに手に入らない環境は海外生活で慣れているし、自然に合わせ暮らすだけ。市街地までかかる時間も、渋滞がひどい都会よりはずっと短い。はじめは外国語だった方言も、理解できるようになったしね」。

周りが思う不便さなど、さして気にする様子もありません。活徳さんは毎日、自宅で尺八を練習しているほか、合間を縫って尺八を製作。そのほか「東農機具利用組合」に所属しトラクターを運転しながら農家の手伝いをしたり、自分で米や野菜づくり、屋根葺き

山間の小さな集落で、尺八とともに 変わらないふるさと残したい...

神奈川県出身ノイギリス・ロンドン・イターン・6年目
HOSHINO KATSUNORI
01 星野活徳さん一家（古屋敷）

にも挑戦したり。さらに、昨年から子どもたちが通う東小学校で、6年生に尺八の吹奏を教えるなど、地域活動にも幅広く関わっています。

「毎日見ている景色の移り変わりや山並みに浮かぶ雲が好き。また何気ないことだけ

ど、いつも気軽に声をかけてくれる地元のみなさんには、気持ち的なゆとりや懐の深さがある。人と人とのつながりやちょっとした会話の大切さを実感する」。一方で「上山に移住者を増やすには、小さい子どもがいる世帯をターゲットに、子どもたちを安心して育てられる環境や支援が必要だと思う」と話します。

子どもたちに残すもの。
「最終的に家族が集う場」

星野さんには3人のお子さんがいます。懐多くん（小3）、佳乃葉ちゃん（小1）、小冬ちゃん（3歳）。上の2人はロンドンで、小冬ちゃんは古屋敷で生まれました。3人は大の仲良し。いつもみんなで賑やかに遊んでいるそうです。「古屋敷は景色がきれい。お父さんは尺八がとても上手だから、ぼくも大きくなったら吹いてみたい」と懐多くん。

「お家が一番好き。将来はバレエの先生になりたい」と佳乃葉ちゃん。「わたしもお家が大好き。だって生まれた場所だもん」と小冬ちゃん。

「子どもたちが成長したとき、自分が育った家、風景など心の中ではつきりイメージできる。変わらないふるさとを残してあげたい。これから進学や就職で県外に出ていくことがあるかもしれないけれど、帰ってきたいと思えるような、最終的に家族が集える場になれば」。星野さん夫妻は、無邪気に笑う子どもたちこそと目をやります。

「これまでの仕事で得てきた経験を、うまく地域活動に結びつけていきたい（浩子さん）」。今後はもっと積極的に福祉施設などを訪問し、より多くのみなさんに、竹の出す自然の音色を聴いてもらいたい。尺八を通じたつながりをどんどん広げていければ嬉しい（活徳さん）。

広さ3畳ほどの尺八工房。そこには「おしごとがんばってね」「いつもありがとう」と、子どもたちが描いたお父さんの似顔絵が飾ってあります。何ともやわらかな明かりを背に、活徳さんは今日も昔から変わることのない竹の音色を響かせています。

ほしの・かつのり
17歳から、永井栖鳳さん指導のもと尺八吹奏を始める。3歳で当時勤務していた出版社を辞め浩子さんとイギリス・ロンドンに移住。主に日本語の書籍を扱う書店を経営しながら8年間、海外で生活し、平成14年に帰国。現在、古屋敷地区で尺八を中心とした生活を送る

工房で尺八を製作する星野さん

